

日本銀行
帯広事務所長

水川 達生



十勝を舞台とした連続テレビドラマがついに最終回を迎えている。半年間続いた楽しい日課がひとつ減り、寂しさを感じている読者も多いのではないだろうか。

ドラマでは、十勝ともうひとつの舞台である東京との間を主人公やその家族らが何度も行き来していた。時代設定の1940年代後半から70年代半ばの十勝―東京間の移動といえは、終

盤の数年を除くと、鉄道と船青函連絡船)によるものだったから。移動時間は、時代が進むにつれ短くなっただろうが、それでも一日がかりかそれ以上の大旅行だったはずだ。それが今では、帯広空港から飛行機に乗れば、1時間45分で羽田に着く。移動の効率化は、地域のくらし、

月に公表された提案概要をみる。自動車普及率が全国一ともいわれる十勝ではマイカー利用が多く、あまり気にならないか。国際路線の誘致・拡充、貨物の温度管理設備やビジネスジェットの専用施設の整備などを進め、十勝の食、温泉・自然の組み合わせた滞在型観光、旭川、富良野、美瑛方面や道東全域との周遊観光、十勝産品の移出・

る。自動車普及率が全国一ともいわれる十勝ではマイカー利用が多く、あまり気にならないか。こうしたヒトやモノの移動に関する課題に最新のデジタル技術を活用するなどしてチャレンジする取り組みが始まっている。道は今年、十勝をモデル地域としてスマートフォンを活用したMaas(マース)の実証実験を行う。また、管内の複数の自治体で自動運転バスの実証実験が行われ、道東自動車道にスマートフォンチャレンジを設置する構想もある。

移動の未来を拓く

ひら

経済活動に大いにプラスに働いている。その空港について7月、道内7空港の運営を一括民間委託する優先交渉権者が決まった。8

輸出を促して、30年後の年間旅客数は現在のほぼ2倍の133万人をを目指すという。その効果を最大限引き出す

の向上が挙げられている。広大な十勝において、移動の問題は何も観光分野に限らない。運転免許を返納した高齢者や所有にこだわらない若年世代など、今後増加が予想されるマイカーを持たない住民の生活の足をいかに確保していくか。自然災害のリスクや企業の人手不足感が高まる中、生産・消費活動を支える物流ネットワークの安定性、効率性をどう維持・向

新しい取り組みには、技術やコストの問題がつきものであるほか、地域の幅広い関係者の連携が必要で、具体的な成果に結びつくまでには時間がかかるかもしれない。しかし、先のドラマでも描かれていたとおり、当地は開拓者精神が脈々と受け継がれている地域だ。移動の未来がここ十勝から力強く切り拓かれていくことを期待したい。

かちまい 論壇

オピニオンページ